ACADE見IC No.165

文学研究科

川添信介教授

西洋中世哲学史の魅力

「西洋中世哲学」と言うと、多くの方が「キリスト教の哲学」だと思うでしょう。それは事実であり、キリスト教と不可分のものではありますが、我々は中世をむしろ現代の西洋文明の基礎として考えます。例えばＥＵのように西洋を一つの文明圏として見る考え方が出てきたのは、フランス・ドイツ・イタリアという政治的文化的まとまりができた中世から。西洋文明を理解するために、中世は避けて通れない。「何で西洋を理解する必要があるんだ」とお考えになるでしょうが、今の日本を規定する人権・民主・司法といった制度や考え方の起源は、中世の西洋だとされているんです。日本は明治以降、西洋に起源を持つ仕組みを取り入れていますね。しかしそれは実学的なものばかりで、背景の基本的な考え方については不十分です。決して西洋賛美ではなく、西洋の文明から大きな影響を受けているという事実をどれだけきちんと理解するかが、現在の我々の生き方を考える上で不可欠だと思います。

つまり、日本に影響を及ぼした西洋を理解するには、中世という時代と、そこで育まれた考え方を丁寧に押さえておくことが必要です。そして本当の意味で理解するには、哲学という一番根本的なもので世界を見て理解すればいい、ということですね。単純に面白いというのもあるけど、改まって言えばそんな感じ。

僕自身は、実は修士論文まではデカルトの研究をしていたんですけど、ちょっと違うことをやりたいと思って、専攻を中世にガラッと変えたんですね。

きっかけとして一番大きいのは、当時中世を担当しておられた山田晶先生の影響です。先生の授業や演習が非常に面白くて。特に演習で、ラテン語のテキスト一つ一つを、非常に緻密に読み進めていく、その姿勢から受けたものが非常に大きかったんです。

もちろん、それだけではありません。「デカルトとは違うものを研究してみよう」と思ったときに「デカルト以降の哲学は彼の影響を避けられないし、前の時代にさかのぼった方がやりやすいだろう」と思ったのもありますね。それで博士課程から、中世西洋哲学へ、具体的にはトマス＝アクィナスを中心としたスコラ哲学を専攻にしたんです。専攻を変えるのに迷いはありませんでした。ただ単純に面白いことをやりたいというだけ。「哲学」の中身、大仰に言えば世界の理解の仕方が違うものをやりたいってだけでしたしね。

川添教授プロフィール

1955年生まれ、佐賀県出身。

1974年に京都大学文学部に入学。同大学院文学研究科修士課程、博士後期課程を経て、1983年にフランス給費留学生としてパリ第10大学とEcole Pratique des Hautes Etudesに留学。

帰国後は大阪市立大学文学部哲学科講師、同助教授を経て、1996年に京都大学文学研究科助教授に着任。2004年より現職。他の国立大学にはない、西洋中世哲学史研究室で研究・教育に当たる。

2009年、京都大学生協理事長に就任。

はみだしすてーじ

コギト＝エルゴ＝スム
⇒さらりとそう言ってのけるデカルト先生は偉大だと思いませんか？

（法・２　ラガネット池田）
（さあ、文学部４階に行きましょう；編）

留学という経験

フランスに留学したとき、そこで行われている学問だけでなく、ヨーロッパ的なるものを街の生活の中で感じることができました。具体的に説明するのは難しいけど……「個」というものですかね。ヨーロッパは、やはり関係の核としての個、つまり自分自身をキープするのが第一で、その上で他者との関係を構築していくと考えられます。それが、どこかでヨーロッパ的な文明のあり方と繋がっているんです。一方、日本は他者から見た自分、という自己の捉え方をしているように思えます。こうして日本的なる人間関係をはっきりと捉えられるようになったのも、留学して西洋に接したからこそですね。抽象的な言い方だけど、「何を勉強したか」よりも、１年４ヵ月生活したという「経験」に最も意味があったと思います。

▲研究室の本棚。「哲学は普遍的なもの。だから専攻分野と関係のない本も読む」とのこと

教授の日常生活

僕自身は講義も午後だけなので、朝10時ごろ起きて、夕食は帰宅して食べて、また研究室に戻ってそこに２時３時までいます。完全に夜型ですね。学生に「１時２時に電話すると、連絡がつきやすいよ」と言うほど。生協の理事会や学生部の会議、文学部の会議など研究以外の仕事も多くて予定を覚えきれないので、ウェブ上でスケジュールを管理して携帯電話で確認しています。

理事長から見た生協

生協に関わりだしたのは最近のことだけど、福利厚生には昔から関心があって、食堂とか宿泊施設とか、もっと改善する余地があると思っているんです。京大として大学生活をサポートするために、学生さんの要望に対し誠実に対応し、環境を整えるよう検討する必要がある。劣悪な環境では教育や研究も進まないし、もっと力を入れてもいい分野だ、と。そこで大学の福利厚生を委託されている生協に関わることで少し現状を変えられるかな、と思って理事長を引き受けました。

理事長としては、経営問題が第一の懸念事項です。生協は本来大学が担っていた福利厚生を、委託されているんです。だから大学も丸投げせず、逆に生協も勝手にやらず、もっと関係を緊密にして、一体化して一緒に考えることが必要だと思います。

現代の教員と学生論

最近の大学教員に必要な資質として、僕は「頭をすぐに切り替えられること」を挙げています。良し悪しはともかく、現実として必要な能力になっているんです。前の仕事を引きずっていると次の仕事が進まないので。授業の後には事務的な会議に出席するなど、教員は昔のように自分の研究だけ考えていられない状況にあります。でも、大学教員が雑務に追われてばかりだと「学問の喜び」というのが学生に感じられない、大学教員が魅力的な仕事に見えないよね。教員がいかにも面白そうに学問に勤しんでいる方がずっと良いでしょ？

僕は生協の仕事の関係でいろいろな企画を持つ学生さんと話す機会も多いのですが、よく「経営マインドを忘れるな」と言っています。予算や人員などの限界や制限がある中でどう工夫するか考えることで勉強してほしいと思っているんですね。損得考えずに活動するべきこともあるけどね、現実の世界で社会人として成長するためにも、経営マインドを持っていくのが大切です。

ほかに最近の学生さんに関して言うならば、自分の要求を熱心に主張している感じがしない、サイレントな感じがするんです。ごく一部の人が声を上げているだけで、いわば「サイレントマジョリティ」が何を考えているのか、ということが周りに伝わっていないんですね。少し内側に目が向きすぎているのかなあ。ある意味で元気がないというか、アピールが足りないというか。

▲「学生さんも昔は自学自習の気風があったけど、最近はそうとは限らないね」

人は社会との関わりの中でしか生きられないのだから、もっと外向きになって、発言してほしいですね。

―― *ありがとうございました。*

（遊歩道）

はみだしすてーじ

バイト先の塾の生徒がフレミングの左手の法則を一生懸命に右手でしていた。
⇒先輩の御友人は、それを試験中にやっていたそうです。

（工・２　D.I.J）
（今ならまだ遅くない、手遅れになる前に！；編）